

## 斑鳩物語

推古天皇四年（596年）冬十一月、法興寺が完成した。飛鳥寺である。

金色の相輪を乗せ聳えたつ五重の塔、光輝く瓦葺の金堂、朱色の柱が並ぶ長い回廊、風にはためく五色の旗と吹流し。それはこの国の誰もが見たこともない、壮大華麗な光景であった。

この日、大王家、蘇我一族、有力豪族たちが礼服をまとって飛鳥寺に参集し、慧慈（えじ）法師を中央にした大勢の渡来学僧の読経に耳を傾けた。厩戸皇子は大王家の日嗣皇子として推古女帝の横に座り、金色に輝く仏像に驚く豪族たちの声を聞いていた。

「なんと麗しき姿ぞ、この世の極楽を見ているようだ」

「さすがに大臣、まるで夢を見ているようでござる」

彼らの声は全て、今日の落慶法要の立役者、蘇我馬子に対する賞賛の声だった。

やがて法要の儀式が終わり、舞台では百済の伎人（わざびと）たちの宴（うたげ）に替わっていた。厩戸はいつか夢を見ていた。夢の中では異国の楽人達の演奏に合わせて、あでやかな入子菱模様の倭錦の衣を纏った女人達が舞っていた。その厩戸の耳に、ひときわ鋭く高い笛の音が響いてきた。その笛の音は哀しさと美しさと複雑な音色を持っていた。遠い異国の空を思わせる響きを持っていた。そして笛の音に合わせて鞆鼓の音も聞こえてきた。それはたくみに目立たぬように狛笛に調和していた。やがて笛の音とともに不思議な女人の声が厩戸の耳に聞こえた。

「皇子、厩戸皇子、皇子はこの国にまことの仏教の寺院を造るお方でございます。まことの仏教の礎となられるお方でございます」

「それは、狛笛（こまぶえ）でしょう」と、慧慈法師が厩戸に言った。

慧慈は前年に高句麗から招かれた学僧で、飛鳥寺に常住して法華経、勝蔓経の講義をしており、また厩戸の師でもあった。

「それにしても不思議なことです。先日の法要の時の雅楽は百済の楽人達のはずで、狛笛を吹くものはいなかったはず」

「狛笛……、それは法師のお国の楽器でしょうか」

「そうです。狛笛は百済の楽人たちが用いる龍笛より高く、まるで山中で鹿の鳴く声のように響くので、すぐに分かります」

「我が国にいる伎人で、狛笛を吹く楽人はいるでしょうか」

「さあ、私はこの国へ参りまして日が浅い故、詳しいことは知りませぬが、確か斑鳩の高安には高句麗から参った楽人たちが住んでいると聞いたことがございます」

数日後、厩戸は愛馬黒駒と従者の調子丸とともに斑鳩に向った。斑鳩に行くに



は磯城の三宅ヶ原を通る筋違道に行くことになる。

厩戸はこの国の民人たちから慕われていた。彼らは厩戸が通ると手を打って尊崇の意を表した。なかには木の板を叩いて喜びを表すものも居た。

三宅の屏風の村で井戸が涸れて困っていると訴えるものがあった。厩戸が調子丸から鎌（やじり）を受け取り、地面に突き刺すとそこから清水が湧き出た。片岡の丘にさし掛かると飢えた者が道に倒れていた。名を尋ねたが答えなかった。厩戸は食物を与え、また自分の衣服を脱いでかけてやり、「やすらかに眠れ」といった。

大和川を渡ると斑鳩である。厩戸は黒駒から下りて川を渡った、目の前に矢田丘陵が迫っており、陽の光のせい、あたりの風景は色を失って白っぽく見えた。暫く富雄川の岸を行くと川岸に廃屋があった。近くに行くと、その廃屋は古い寺院のようであった。驚いたことに飛鳥寺と同じように屋根は瓦で葺かれ、朽ち掛けてはいたが朱塗りの柱はまだこの国には見られない建物だった。

笛の音が聞こえたのは、その時であった。その高い響きの音色は飛鳥寺で聞いた狛笛に違いなかった。厩戸が笛の音に誘われるようにその建物の扉の前に立つと、自然に扉が開き、その奥には厩戸が見たことがない仏像が置かれていた。

「それは救世観音という仏様でございます」

驚いて厩戸が振り向くと、飛鳥寺で見た女の人が居た。今日はあでやかな唐絹の衣装に包まれていたが、その姿から韓半島から渡ってきたものに違いなかった。

「百済のものか」と厩戸が言うと、女は狛国（こま）でございますと答えた。

「狛国というと、慧慈法師と同じ高句麗のものか」

すると女はそれには答えず、阿夜伎理（あやきり）という名であることを告げた。

「私は狛国の仏師の娘でございます。この救世観音は父が造ったものでございませぬ。皇子に、厩戸皇子に献上するために造ったものでございませぬ」

「どうして私に、この国にはこのような仏像に相応しい寺は飛鳥寺しかないが - 」

「飛鳥のお寺は蘇我の大臣のお寺。本当のお寺ではございませぬ。この仏様は人々を悲しみや苦しきから救うために海を渡れたのです。皇子、この斑鳩に人々を救うためのお寺を造って下されませ。この仏様のためのお寺を造って下されませ」

厩戸は改めて扉の奥の金色に輝く救世観音を眺めた。その観音は不思議な造形をしていた。驚くほど体軀が扁平で少し俯いているように見えた。大きな杏仁形の目は優しさと神秘的な微笑みを湛えていた。身体の側面に流れる天衣は鳥の羽根のような美しい曲線を持っていた。そして何より厩戸の気持ちを引き付けたのは、その仏像の大きさである。それは飛鳥寺の仏像のように小さくなく、厩戸の背と同じ高さには造られていた。

「高句麗から来たものは矢田山の向こうの高安の地に多く居ると聞いたが、そなたの一族もそこに居るのか」

「いいえ、私の故国は高句麗ではございませぬ」

高句麗より北の「靺鞨（まっかつ）」だと、阿夜伎理は答えた。

「靺鞨の私どもの家も村も、もうございませぬ。私の村の男たちは隋との戦さの

ために高句麗に連れて行かれ、私の父もこの観音様を私に残して連れて行かれたのでございます。私は観音様の安住の地を求めて、この国に参ったのでございます」

何時の間にか阿夜伎理の脇に二人の若者がいた。彼らは飛鳥寺で鞆鼓を打っていたものたちに違いなかったが、不思議なことにその顔は犬の顔であった。

厩戸が斑鳩に宮を造営し、一族と供に移り住んだのはそれから五年後のことで、その斑鳩の地に斑鳩寺が完成したのは、さらにまた五年後のことである。

異変が起きたのは斑鳩寺が完成した年の秋のことであった。

その日、昼の日中に突如日輪が隠れ、あたりが闇に覆われると、斑鳩寺の上空で妖しい光が放たれ、雷鳴が響いた。するとそれを合図のように大和川の芦原から何者かが斑鳩宮や斑鳩寺を目指して迫ってきた。それは鼠であった。鼠の大群が大和川の浅瀬を越え、次々と斑鳩の里を襲おうとしていたのである。

「飢えた鼠が川を越えて襲ってきたのか」

異変に気付いた厩戸は、米倉を護るよう舎人たちに命じると弓矢を持って宮門の外に出た。鼠の大群は宮を目指して迫っていた。

「皇子、鼠は何者かに操られているようでございます」

調子丸がそういうのと、厩戸めがけて大鼠が襲ってくるのが同時だった。あやうくその牙をさけた厩戸を、再び大鼠が襲おうとした時、二匹の犬が大鼠に飛び掛っていった。彼らが阿夜伎理とともに狛国から渡ってきた犬たちだと気がついた厩戸は、犬に襲われてひるんだ大鼠に向かって矢を射た。矢は過たず大鼠の咽喉を貫いたようであった。その瞬間、大鼠の姿は消えた。

「皇子、御覧なされ、鼠が反対に川の方に向かって行きます」

その時、厩戸の耳に笛の音が聞こえてきた。そのひとときわ高い音色は狛笛に違いなかった。阿夜伎理が川岸の丘に立って吹いているのである。鼠たちは阿夜伎理の笛に誘われて次から次に川に飛び込むと、水の中に消えていった。

「何者でしょうか。あの鼠たちを操って斑鳩を襲おうとしたものは」

「この国に正しき仏教が根付くことを恐れた、悪しき神の一派であろう」

その後も、幾度か斑鳩寺は魔物に襲われたが、そのたびに二匹の狛犬と阿夜伎理の狛笛が斑鳩を魔物たちから救った。

その斑鳩寺が炎上して消失したのは、厩戸の死後50年後の670年のことである。しかし厩戸の姿を映すという救世観音は焼けずに残った。それはその後法隆寺の秘仏とされ、長い間人目に触れることなく過ごしてきたが、明治17年アメリカ人の学者フェノロサと岡倉天心によって像を幾重にも覆っていた長い白布が除かれ、広く世に知られるようになった。人々は金色に輝くその観音像が当初の輝きを失っていないことに驚いた。そして観音像には焼け焦げなどの痕跡はなかったのである。

しかし斑鳩寺が焼けた時、無事だった救世観音の傍に、焼け焦げた狛笛と二つの鞆鼓が転がっていたことは伝えられていない。

(おわり)